写実主義へのこだわりとは!!

田島 健次

その応えは毎年発行の画集に付録されている「一水会小史」を見れば納得できます。それは第３回展（一九三九）の『セザンヌ生誕１００年記念特陳』がその源流になっているからです。

明治から大正にかけて八年間のフランス留学を経て帰国された安井曽太郎先生は第２回（一九一五）の二科展に四四点の作品を特陳されました。これが日本の洋画界に衝撃を与えたのです。

安井先生がセザンヌの作品に出合い大感銘を受けたことがその後の安井芸術に繋がったことは云うまでもありません。ではセザンヌの思想とは何か。端的に云えば「感覚の実現」ですが、この易しいようで難しいフレーズは、自分の力で見て感じて構築（実現）させることなのでしょう。権威と闘い近代絵画の第一走者となったマネの一滴が、その後のセザンヌの大河に発展しました。そして絵画の自律性をかかげながら、新しい時代と向き合って創作することが一水会の流れにつづいていると思います。

二〇一七年　春　　田島 健次

田島健次 画

ごあいさつ

事務局長 玉虫 良次

今年度事務局を引き継ぐことになりました、玉虫良次です。よろしくお願いいたします。私には大変荷が重いのですが、多くの先生方のご指導と事務局のメンバーの助けで何とか出来ればと思っています。何よりも会の皆様のお力が支えですので、ご協力お願いいたします。会計の係も西真里子に滝沢美恵子が加わり少しずつ引き継いでいきます。

さて、第79回展は、大きく二つの取り組みがあります。

一つ目は図録の様式を変更することです。今までのＡＢ判変形から、Ａ四判の大きさになります。掲載する作品のレイアウトは委員が二頁二点、会員・準会員・会友・一般の方は一頁六点になります。図録をお渡しする方法も変わります。詳しくは本紙十六頁をご覧下さい。

二つ目は東京都美術館のロビー階・第一棟から第四棟まですべてが一水会展会場になります。今まで展示作品の間隔が広く取れず、二段掛けで展示せざるを得ない状況でした。一棟増えることで、より鑑賞しやすい展示が出来ると思います。しかし入選点数が大幅に増えることはありません。一水会を鑑賞された多くの方が、「レベルが高い」という感想を持たれています。それは作品の審査基準が「甘くない」ということです。会場が広くなることで審査基準を変えることは、一水会展の質も変化してしまうことになりかねません。今まで厳しい審査を通って入選した作品でありながら、会場の関係で鑑賞しにくい位置に展示せざるを得なかった作品が、会場が広くなることでより鑑賞しやすくなると思って頂けると幸いです。今までよりも入選しやすくなると思わずに、力作を制作していただきたいと思います。

機関紙

一水会

No.8
『夏号』

発行日／2017年5月1日
発行人／小川 游

編集責任者／さきやあきら
発行／一水会事務局
〒192-0364
東京都八王子市
南大沢2-224-3-502
玉虫良次方
Tel.042(674)6922
http://www.issuikai.org/

題字／有島 生馬

第79回一水会展出品の注意

出品申込書・出品票はコンピュータで処理をしますので、必ず「第79回展用」を使用して下さい。

新たなる展望

第56回 一水会選抜展

三月十五日から三月二十一日まで、日本橋三越本店美術特選画廊にて第56回一水会選抜展が開催されました。運営委員、常任委員、三十三名とその他の選抜者三十三名の10号程度の作品六十六点と小品三十四点。三月十八日のギャラリートークでは、寺井力三郎先生と山名将夫先生が七十名程の聴衆を前に、作者の紹介と作品の見方等を丁寧に説明しました。

居合わせた作者にもマイクを渡して作品に込めた気持ちを披露してもらいました。三越特別食堂での打ち上げは三十名が出席。新事務局長の玉虫良次先生が、一水会のホームページで精鋭展、選抜展の写真をすでに載せたことを紹介し、インターネットも活用して今後の一水会を盛り立てていきたいと締めくくりました。

（西 真里子 記）

深沢紅子野の花美術館 一水会選抜展

盛岡「野の花美術館」訪問記

田島 健次

北上川に合流する中津川沿いに建つ野の花美術館は白亜の瀟洒な建物で、今年は開館二十年を迎えました。川原にはまだ雪の塊が残り、忘れな草の姿は隠れていたけれど、代わりに鴨の群れが私たちを出迎えてくれました。初日の三月二五日には沢山の入場者があり、廣畑正剛先生、重石晃子先生と私の三人でギャラリートークを行いました。自然を観ながら感じて表現することの苦心や喜びの体験と共に描写のコツなど質疑を交えて歓談しました。余談ながら、たまたま館内にあった中村彝展のチラシを見て、中村屋とインドカレーについても話が弾みました。

東京の会場から、みちのく盛岡まで作品を運ぶこの移動展は、一水会本展と併せて、これからも末永く続けるべきという意義を強く感じています。そして奇しくもこの日は紅子先生の御命日であることも知りました。

（最終日四月十二日）

若者を迎えて　大いに盛り上がった
第78回 一水会名古屋展
二〇一六年十二月六日(火)～十一日(日)

今年は愛知トリエンナーレの影響で、二部屋少ない会場でしたが、陳列点数一八一点(うち地元一〇三点)が並び、本部から辰巳文一先生、山名將夫先生をお迎えして、華やかなオープニングとなりました。約六七〇〇人の入場者で、例年と変わらない盛り上がりを見せましたが、入場者のうち二四二人が学生であったことは特筆すべきことでしょう。

中部では　若い世代にアピールしていくことを考えて、ワークショップを行ったり、75回記念展より高・大生を無料にしたりしてきました。

そのような中で、出品者の秦 敏信氏の関わる市内の専門学校の生徒達が来場し"若い世代の心に残る事を"と田島健次先生、山田正博先生によるミニミニ講義が即興で行われることになり、約一〇〇人の学生が参加しました。

学校では動物トレーナーや、トリマーなどを目指している学生達ですが、セザンヌの絵画理論など専門的な話から、作家が何を見、感じ、どう制作するのかの幅広い話に聞き入っている姿がとても印象的でした。

学生達は、美術館に来ることも、大きな絵の前に立ったことも初めての人が多かったようで、「参加してよかった」という声が多く聞かれました。

この講義の後、最終日までの三日間学生の入場が続いたのはこれまでにない事でした。

これを機に美術館に気楽に足を運んでくれる若者たちが増えて、この交流がその始まりになるよう、教育現場との話し会いが始まっています。

中部一水会は今後も若い世代に働きかけて、未来への種まきを続けていきたいと皆で盛り上がっています!!

(相馬 順子 記)

第2回 一水会静岡地区作品展
2017年2月20日～26日
会場／クリエイト浜松 ギャラリー33

昨年、地元の皆様の予想以上の反響をいただきましたことが2回目開催の原動力となり、昨年以上の入場者数を目標に、新聞社の後援など、広報に力を入れ準備を進めてまいりました。今回は大作一点(本展出品作品)、小品三点を持ち寄りました。静岡地区は構成メンバー八名中、会員三名、会友三名と少数精鋭を自負しており、各自力作をそろえた展示でした。入場者は目標を大きく上回る一二五〇名を数え、来場された方々から、「レベルが高い」「品格がある」などとご好評をいただき、励みになりました。

なお、昨年の開催を機に新たに一名の出品者が増え、今年も若干の手ごたえがありました。一歩一歩ではありますが、今後仲間の広がりを願うとともに、メンバーの益々の技量の向上を誓い合いました。

(鈴木 喜博 記)

短信
荒蒔邦弘さん 藝文センターで 作品展

会場に入ると荒蒔さん独自の静かに物語る絵が心やすく迎えてくれます。

一水会委員の荒蒔邦弘さんの作品展が昨年十一月三十日から約二カ月にわたり、茨城県水戸市の芸文ギャラリーで開催されました。会場は前期・後期に分けて氏の大作十六点が展示され、連日多くの来場者で賑わったと伺います。ロビーでは、風景を得意とする荒蒔さんの現場スケッチやアトリエでの制作の様子が大型テレビに流れて、ファンの関心を集めていました。

前期／2016年11月30日～12月27日　後期／2017年1月5日～29日　公益財団法人・常陽藝文センター

[特集] 第14回 一水会精鋭展

三月十三日～十九日東京銀座画廊・美術館において、八十名による50号一点ずつの作品が展示されました。初日のオープニングには多くのご来賓にご臨席いただきました。立軌会の笠井誠一先生からは、「十年以上、この展覧会を見せていただいているが、近年はレベルアップして緊張感のある展覧会になっている。その理由は一水会に依存しているばかりではなく、個展や会外での活動をする人が増えている事だと思います。」と、お祝いの言葉をいただきました。今年から『精鋭展推賞』が設けられ、受賞者には小川代表から賞状と賞金五万円が授与され、大いに盛り上がりました。来場者は一四五〇名でした。

展評

山本 耕造 先生

精鋭展は今年で14回目の開催となりました。日美の画廊で、委員と受賞者が出品する［九月会展］として始まり、その後、東京銀座画廊・美術館への移動を契機に、一水会展で三十数名を選抜して［第1回新鋭展］になりました。10回目の記念展からは、現在の広い会場に移した上、出品者を約八十名に増やして［精鋭展］に改称し、今日に発展してきました。

出品者の選抜は、「確かな技量と表現に積極性が感じられる作品」、「新しい展開が期待される作品」というところに重点を置き、一水会展での受賞には拘らず、出来るだけ新しい人を選ぶ方針のもとに行っています。今回からは『精鋭展推賞』が設けられ、最初の受賞は**中澤嘉文氏**の「雪が来る」と**久保慶議氏**の「残された風景」になりました。中澤氏の作品は、海岸付近の厳しい冬景色をリアルに描き出して

この人に注目 8　木村 毅 さん

昨年、文部科学大臣賞を受賞された木村毅さんは広島県在住、高校の美術教師を四年前に定年退職されました。

〈聞き手〉加曽利 光男

――一水会はいつから？

45回展初入選、31歳でした。高校の恩師、久保田辰男先生との出会いがキッカケです。

――絵はいつ頃から？

高校時代から油絵を始めました。武蔵野美術大学卒業後、教員になって、暫くは忙しくて描かないでいました。そしたら久保田先生が「**描きよるか？**」って。描いていませんって言ったら、「**描けよっ！**」。ということで地元でのグループ展から再開しました。

――地元での活動は？

おり、確かな技術に裏打ちされた力作で、まさに一水会の写実の伝統を踏まえており、大変印象に残りました。久保氏の風景画は、独自のマチエールと赤さびた鉄板を思わせるような色調で、心の奥の深い記憶を呼び起こす新鮮な表現でした。

近年の精鋭展はレベルも上がり、来場者や関係者からの評価も高くなっています。しかし全体的には破綻が無く、大人しい無難な絵が多い印象は今回もあまり変わっていないようです。選抜の狙いからすれば、もう少し冒険しても良かったのではないでしょうか。苦心して作り上げてきた自分の表現を変えることはとても難しい事だと思いますが、もし現状に満足していないのであれば、少し新しい試みをしてみる勇気が必要だと思います。

期間中、約一五〇〇名の来場者の眼と共に出品者には自分の絵を客観的に見つめ、分析し、課題を考える良い機会となったことでしょう。そこで感じたことをこれからの制作に生かして大いに発展、深化させて頂ければと思います。

精鋭展推賞　残された風景　久保 慶議

精鋭展推賞　雪が来る　中澤 嘉文

アトリエの花　新井 隆

朝の月・ついじ　保坂 晶

ショーケース　加曽利 光男

広島県美展など地元の公募展に出品していたことがあります。今は、『広島一水会・路展』事務局の活動を軸に、NPO法人ひろしまインターネット美術館、広島市文化協会などに関わっています。

――好きな画家、影響された画家は？

昔からパウル・クレーが好きです。理知的な感じと色の構成に惹かれます。久保田先生とは長いのですが先生はああしろ、こうしろとは言わず、ただ描けとの教え方でした。

これからは、人物を入れない風景画なども描いてみたいと思っています。瀬戸内海の海だけとか。そんな絵を地元の展覧会には出したことがあります。80号でケント紙に色鉛筆だけで描きました。

――日常生活は？

これといった趣味やルーチンはありません。昔はギターを弾き、作詞作曲を楽しんだことがあります。

……

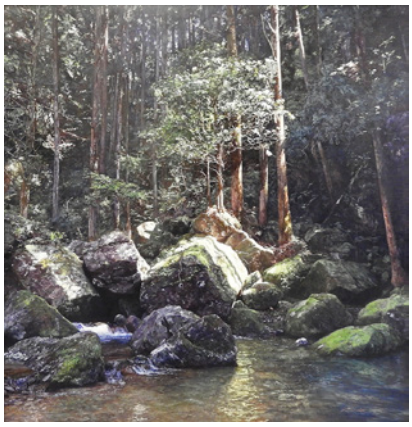
お嬢さんが選んでくれた丸眼鏡が良く似合う、さだまさしさん似の木村さん。終始、落ち着いた語り口で、古風な感じの漂う温厚な紳士でした。

とどまることのない生命　　中村 哲泰

雪　　弓手 研平

石狩湾　　栗原 髙光

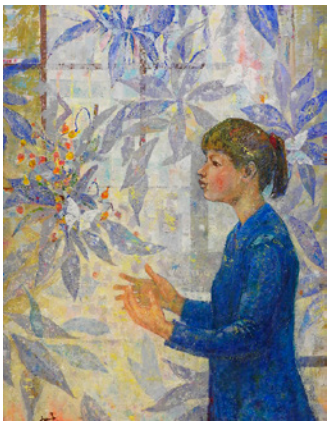
卓上のうた　　北村 春美


生命の樹　　伊藤 尚尋

画室の静物　　斎藤 由美子

ミコノスの港　　村上 選

小さな冬景色　　浅見 文紀


音のなる木　　相馬 順子

桃畑　　若林 治良

仮面の踊り子　　外山 順子

輪廻　　久保 博孝

生誕100年 木村 辰彦展

二〇一六年七月二日～九月四日　小山市立車屋美術館（栃木県）

木村辰彦氏（一九一六～一九七三）は一水会の大先輩。

二〇一二年夏に東御市梅野記念絵画館（長野県）で大回顧展が開かれたのを機に、二〇一五年春の朝日美術館（長野県）、そして今回の展覧会へ矢継ぎ早に開かれて、たいへん好評を博してきました。

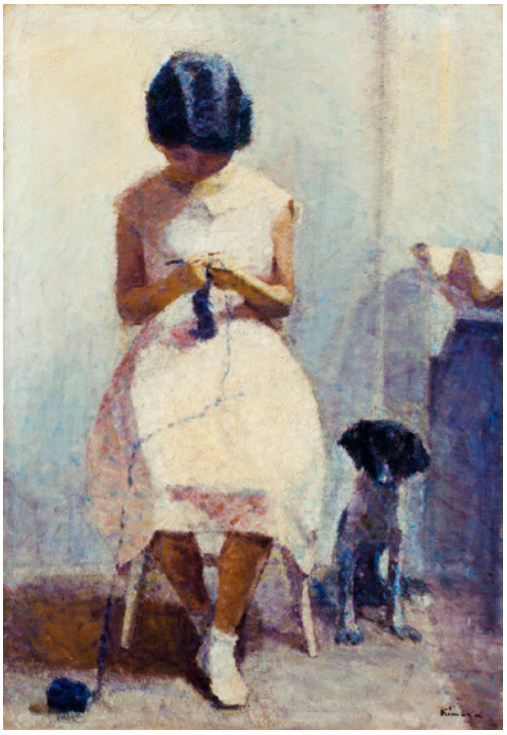
夏の強い日差しのなか、小山市立車屋美術館は涼やかな姿で私たちを迎えてくれました。奥行きのある、白壁の平屋建ての建物とそれに隣接する風格ある二階建ての日本建築に、落ち着いた趣の日本庭園も魅力です。

「銀盆に洋梨のある静物」　油彩　6F

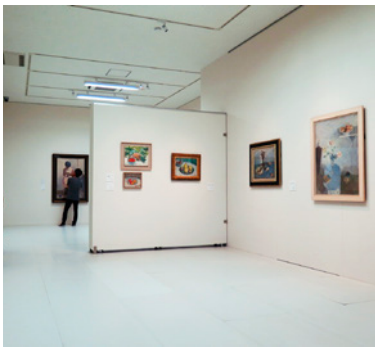
会場の美術館は、江戸、明治と思川水運の要所となった豪商の建物（国登録有形文化財）―主屋、土蔵、表門、米蔵、肥料蔵のうち、米蔵を整備、改装して二〇〇九年に開館しました。中に入るとすぐに温かく重厚な色彩の人物習作が目に留まり、たちまち木村辰彦の世界に引き込まれました。そして会場を進むに従い、氏の力量の高さに圧倒されるのでした。

木村辰彦氏は、一九一六年東京の生まれ、安井曾太郎の連袖会（れんしゅうかい）の一員として研鑽を積まれました。一水会展には第2回展（一九三八）から出品、一九四一年岡田賞を受賞、四十六年会員推挙。五十一年に会員優賞、六十年に委員になられています。

「娘と犬」（一九六二）をはじめ、氏の代表作を含む四十九点の展示。愛情をもって身近な日常の風物を丹念に観察し、きびしい画面構成と輝く色彩に仕上げる氏の作品。やや厚めに盛り上げられた絵の具の物質感の強さが、見る者の心をひきつけて離しません。



「娘と犬」　油彩　50P



木村辰彦独自の作品世界が、平成の美術ファンの間に今後一層広がっていくことを願うものです。

（さきや　あきら　記）

風を追いかけて―　重石晃子展

「春雪」　2009年　100S

「大聖堂へ向う」1999年　100F

一水会委員の重石晃子先生の展覧会が開かれています。七十年代以降に制作され、一水会展や女流画家協会展に出品された油彩作品と共に画家のことばを展示し、画業をたどります。ご高覧下さい。

四月二十二日～六月四日

九時～十七時

休館／毎週月曜

観覧料金／五百円

岩手町立石神の丘美術館

☎〇一九五―六二―一四五三

久保田辰男 絵画展
～ふるさと・牛歩の50年

●会　　場
広島県立美術館 地下 県民ギャラリー
第4、5展示室〈入場無料〉
●会　　期
2017年3月28日(火)～ 4月2日(日)
●開場時間
9:00～17:00(金曜日は、19:00まで)
●後　　援
広島県教育委員会　広島市教育委員会
東広島市教育委員会　中国放送
中国新聞社　広島市文化協会
ひろしまインターネット美術館

久保田辰男絵画展 盛会のうちに閉幕

去る三月二十八日、広島ではソメイヨシノの開花宣言とともに「久保田辰男絵画展～ふるさと・牛歩の五十年」が幕を開けました。

展覧会のサブタイトルに敢えて画業という言葉を避け、牛歩の五十年という言葉を選ばれたことには先生の人柄を強く感じます。

初日は、平日にもかかわらず、三百名近くの来場者がありました。その後も盛況が続き、最終的には、一七五三名という大変多くのご来場をいただいて、大盛会の内に幕を閉じました。

会場には、先生の初期の二十代の作品から現在の作品までを年代順に陳列しました。そして、所々にその年代の自画像を配した結果、緩急のある配置が鑑賞しやすいとの声をたくさんいただきました。

また、年代順にしたことで、「老人」から「家族」、「母」、「母と牛」、「牛とふるさと」とモチーフの変遷を辿ると同時に、一貫して揺るぎないテーマを明白に感じていただけたと思います。

私のようなまだ勉強中のものには、筆触や色調の移り変わりは大変参考になりました。来場された、絵を描く方にお話を聞くと、会場で絵の前に立つと我が絵を省みて励まされるという方が多く、全く同感でした。

久保田先生は、制作の傍ら、教員としていくつかの学校に勤務されました。その間の教え子の方達が会場に詰めかけて旧交を温めあっている姿が毎日のように見られ、先生の人を繋ぐ力には改めて敬服しました。その方達の中には、各界で活躍されている方が多く、先生の指導力、影響力の大きさも改めて感じました。このことは、画業のことからは離れますが、久保田先生のもう一つの側面として看過出来ません。

最終日の日曜日とその前日の土曜日には、ギャラリートークを開催しました。先生は、一点一点丁寧に会場を巡りながら、その絵についてのエピソードを中心にお話しされました。軽妙で時折ユーモアを挟んでのお話は、聴衆を飽きさせず、一時間程度のお話を皆さん、最後まで熱心に聞いてくださいました。

遠方にもかかわらず、小川游先生をはじめ、各地の一水会から、多くの先生方に来ていただきました。本当にありがたく、嬉しく、おかげさまで、我々実行委員会のメンバーは、達成感とともに、久保田辰男絵画展を無事終えることが出来ました。

ご協力いただいた皆様にはこの紙面を借りて、厚くお礼申し上げます。

（木村 毅 記）

「帰郷」　1976年　F100号
第38回一水会展　東広島市立竹仁小学校 蔵

牛歩50年の出発点という作品

「昼下がり」　1965年　F80号
第27回 一水会展　一般佳作賞

「明日へ」　2013年　F130号
第75回記念 一水会展

「静日」　1993年　F100号
第55回記念 一水会展　一水会優賞

第3回 東京一水会展

2016年4月22日～27日
O美術館（東京都品川区）

20号から50号の作品で出品点数四三点、小品が八点。作品の傾向としては、対象をそのまま写し取ろうとする作品。対象を描くに留まらず、そこに精神性をも描き切ろうとする作品等々、力作が並びました。

オープニングパーティには、小川游代表はじめ、多数の来賓の先生方にご臨席いただき、田中義昭先生の乾杯のあと、皆様からお心のこもった力強いおことばを頂戴し大いに盛り上がりました。

玉虫先生の作品講評が一点一点丁寧に行われ、みな真剣な面持ちで聴き入っていました。入場者は約千人。

東京一水会では年二回の研究会があり、先生方の厳しいご指導が行われていますが、そこに一水会への熱き思いと優しいお心があるからこそ、明日への一歩に繋がってゆくのだと思います。

東京一水会は発足してまだ数年、伸びしろは、まだまだありますので温かく見守っていただけたらと願っています。（滝沢 美恵子 記）

「母」　1986年　鉛筆

「平家谷」　2011年　ペン淡彩

あのころ これから

辰巳文一先生訪問インタビュー

聞き手／新井・さきや　撮影／西

—このあたりまで鹿は来ますか？

入ってきます、通りますわ。

—辰巳先生はここでお生まれに？

はい。この町はね「紀寺町」。紀寺は南都七大寺の一つやねん。その寺はもうありません。それからこのちょっと上にのぼったとこに石が三つに割れて「割石町」。奈良に都があったときに藤原氏、吉備氏、安倍氏、その三つの豪族の境界ですねん。町名なんぼでもあるのですが…。

—この辺りは文学者や画家の多いところということですが。

志賀直哉でしょ、「暗夜行路」書いたひと。二科の浜田葆光さんは、ここの上なんですわ。小野藤一郎さんは一水会に出てます。それから足立源一郎、河上一也もこの上でした。それから杉岡華邨さんは書道。このあたりに固まっていたから自然に僕自身も絵とか音楽とか、まぁそういうふうなことですわ。

僕は昭和十年頃に奈良女子高等師範学校付属幼稚園に入って、奈良公園をずっと横断して歩いて行ってました。で、その幼稚園の「手技帳」がこれなんです。

—幼稚園のときに描かれたんですか？

線は全部先生が描かれ、僕らは塗っただけや。その時分の幼稚園の教育はこんなんですわ。私の学級の先生をしていた藤田静枝先生が、須田国太郎さんのお弟子さんと結婚してはるから、美術については詳しかったと思う。

—子供の力量とそれを手助けする大人の部分とをちゃんと線引きしてますね、色もその当時のままで材料も質が良いものじゃないと残りませんね。

そうやねぇ。その後山下新太郎先生が志賀直哉さんの家の前で、藤の花が垂れ下がっているのを絵に描いておられるのを僕が観ていた。大きなパラソルの下で描かれ、奥さんがその周りでワラビを採っておられた。浜田葆光さんの家に泊めてもらわれた、同じ二科同志やから。

—山下先生だというのはのちに知るのですか？

そうですね。

それから小学校は奈良師範学校付属小学校。昭和十六年には奈良中学校へ入学する。その頃は自分の楽しみで絵を描く。それからテニスも一生懸命やっていた。

—スポーツマンだったのですね。

はい。

—この頃からもうスケッチをされていた。

そう、絵を描く環境に育っていたということですねぇ。

それから、奈良師範学校（現・奈良教育大学）に入学しましたときに、大阪の心斎橋の「カワチ」という絵の具屋さんで絵の具一式おじいさんが買うてくれた。二十四円九十六銭か？これで絵の具セット全部や。

—（当時のチラシを見て）絵の具十二色、筆五本、油壷一個、パレットナイフ一本…

税金が五円七十六銭でしょ、だからだいぶ贅沢品やってんなと思ってるんです。

—お爺さまがプレゼントして下さったんですね。

そう、うちの本家が兵庫県の伊丹にあったの。その本家がラムネとかみかん水とかを作ってたんですね。清水の次郎長の孫か息子かがそこへ訪ねてきて製造を教えてほしいとか、あったいうことも聞いてるんですね。僕は大阪へ行ったときには宝塚の少女歌劇観に連れてもらう、阪急でランチ食べるとか千日前の「アシベ劇場」で映画をやってるんだけど弁士が喋るわけで、活弁。また須磨や浜寺へ海水浴へ行ったり。大阪に借家八十五軒持ってたがそれもすっかり燃えた、戦争で。ところがね、境界がわからない、そこから大阪湾が見えるのだから。もう何もかもあらへん、だからどこからどこまでがあんたの家ですよというのがないねん。法隆寺にもあったんですよ田圃がね。もう畑ようせんし、区役所のほうからお金がおりた、それで終わり。そんな時代やね。

昭和十八年十一月二十三日には大阪市立美術館へ第7回一水会展を観に行ってるんです。それがこれ。

「坐像」 F30　1956年　第18回 一水会展

—昔はこういうカタログだったんですね。

坂元一男先生が奈良師範学校の美術の先生でした。

「母子」 P50　1959年　第21回 一水会展　を前に

―ここに出品されてたのですか？

坂元先生と大阪市立美術館で偶然一緒になり、色々喋ってくれはったのがペンで書いてあるのです。坂元先生が東京美術学校を出て淡路島の高等学校へ先生として行かれ、その時に山田兄弟、嘉一郎さん、収男さん教えられた。

―高田誠先生のところにメモが入ってますね、「これは珍しかった、とても良く上手く塗れてあった…」

ははは！こういうの大事にしとかんと。

十九年の七月二十日が学徒動員、愛知県額田郡幸田村「大日本兵器」の工場へ、飛行機の下へ機関砲を取り付ける仕事。そのときも油絵の道具持って行ってたわけです。

―描く時間はありましたか？

日曜日。

―普段は描けないわけですね。

はい。その時に坂元先生からトルストイの「アンナ・カレーニナ」、恋愛小説やね、これはその当時、具合悪いんやけれども送ってくださった。そういう先生や。その先生のお家はこの上でした、よう遊びに行ったんですわ。

―『紅陽会』は学徒動員先で創られた会なんですね。

泉精一はもう亡くなってます。一水会一遍くらい出したかもね。それから増井清、これも出してたんですけどもう、出してません。吉本義夫は今もおりますやろ。島田勝はもう全然出してない。この中には一水会に出してる人もおれば光風会に出してる人もおると。年に二回展覧会をやってました。坂元一男先生を中心にして、それから西岡義一さんは光風会。うちの家のちょっと下の方におられ、日曜日になったらうちに寄られて、「辰巳君描きに行こか」言うて。「ほな行きまひょ」いうことで。一日絵を描いて帰って、また次の日曜日行くっちゅうことでね。

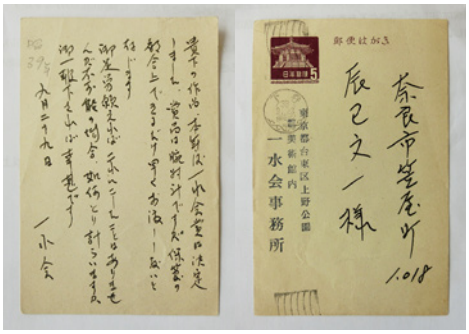
―辰巳先生の「自画像」と「読書」は二つとも人物画ですね。

そうそう、はじめ人物をようやってたけどね。

終戦の年の十二月十二日に石井柏亭先生が、女子高等師範学校の講堂で絵の話をされ、そのあとで石井先生が奈良公園で絵を描かれた。描いてはった場所も今でも覚えています。一生懸命描いてはるのをみんなが見せてもろうた。その時分に私が影響を受けた画家、それはやはり坂元一男先生と河上一也先生、小野藤一郎さん、一水会の人ばっかりです。そして昭和二十三年に奈良師範を卒業して奈良市立飛鳥小学校に勤めるんです。図画室はアトリエ式で北側の窓屋根がガラスになっている、そういう学校。だから画家とかそういう人が多い。ピアノで六年生の音楽も教えてたんです。絵を描いたり音楽を聴いたりねぇ。二十三年の十月、奈良市制五十周年祝賀記念展「公園風景」20号、これがヒックマン軍政府長官賞。軍政府が今の奈良教育大の場所にあった。

それから一水会新入選。その作品ね、志賀直哉邸へ行く途中のすぐそこ、塀だけが今のまま。

―資料がすごいですね。当時の入



一水会賞受賞通知　1964年　第26回 一水会展

選通知。精養軒で懇親会、会費三百円、しかも二十三日、当時も今と同じ頃にやってる。

懇親会のときに安井曽太郎先生がね、「自然をないがしろにしてはいかん」と、そういう話をされた。それいまだに残ってる、僕のノートにも書いてありますね。その時分「やまと」という夜行列車があってね、東京駅に着いたら温泉に入ります。駅に温泉あって、温泉入ってから美術館へ行くでしょ、中で、巻いて持っていったキャンバスを張って描きますねん。今やったら怒られるけどね、当時は何人も描いてはる。僕も搬入の日、最後まで一生懸命描いて。

それから昭和二十三年『一水会関西支部展』ていうのをやるんですわ。皆さんが東京から出してくれてはるねんけれども、「一水会」という名前を使ったらいかんということになって『研水会』になった。一水会へ研くっちゅうのか、昭和二十五年に出来た。中畑艸人先生、松田忠一先生、坂元一男先生あたりが中心になって作られたと思いますわ。

―この目録は「第1回関西支部展」心斎橋の大丸。創立メンバーに加えて池辺均、中村琢二、中村善策…すごいメンバーですね。納富進先生、尾崎正章先生もいらっしゃる。

そうそう、第1回しかやってない。僕は、第26回展で一水会賞を受賞したという通知をいただく。この文章もなかなかねえ、よく書いてある。

―手書きですね、「…都合上できるだけ早くお渡しし度いと存じます 御足労願えればこれにこしたことはありませんが不可能の場合、如何とり計らいますか 御一報下されば幸甚です」これはおそらく高田先生の字だろうと思います。

高田先生の文章で。事務所は高田先生がやっておられ、たまたま先生の奥さん(きよ子夫人)がおられて副賞として腕時計をもらった。こういう通知文書も大事にしとかないといかんね。

―その時の一水会賞の作品は「赤膚焼き」。

三笠中学に勤めてたとき校区に五条山というところがあって、この窯元があったんです。特別に窯場に入れてもらった。その中に広げて描いていた訳や、大体80とか100号で。自転車の荷台に木をL字状に付けてその上に絵の具のセットを乗せて、キャンバスはそこへ二つ折りで。唐招提寺もよう行きましたわ。寺の事務所へ道具だけ預けて、授業終わったらまた行きますねん。

三笠中学で十一年おって、それから市の教育委員会に行った年に日展初入選や。その時に浜田葆光さんの奥さんが教育委員をしておられ、教育委員会でお祝いをしてくださった。

東京オリンピックが昭和三十九年で聖火が全国走るでしょ、それが奈良の知事室へ泊まる時に、知事さんから聖火台作ってくれへんか言われて。志賀直哉邸を建てた大工さんが台を作って、それから火をばあっと挙げるお皿を赤膚焼きで。ずっとゴム管通して、門の後ろ側へプロパンガス置いて僕が前へ出て手を挙げたら、理科の先生がちゃあっと開けてぼうっと点く。上手いこと行った。その知事さんが辞められるときに「県政史」に私の作品を入れられた。

―『県政奈良』という冊子も表紙絵を？

これ一年間描きました。月刊誌ですので、この当時は描いてくれ言われたら、ああ描きましょか言うてやったわけや。

そして昭和三十八年に琢二先生が来られました。

―毎年指導に見えたのですね。

ええ、で、教職員の組合の宿舎がありまして、坂元先生から僕が頼まれて、毎年琢二先生に部屋を世話したわけです。そのときに、紅陽会に出していた「犬吠埼」を、琢二先生が観て「これ、ええやないか」って言われ残しています。

それから、四十六年に『奈良県一水会出品者展』というのを始めたんです。県の女性センター借りてね。六十一年が一水会優賞。「ロハ風景」、スペインです。飛鳥小で校長してたときに、全国造形教育研究大会をやって、四千人ほど来られましたが、そのあとスタッフの人たちから「絵を描きに連れていって欲しい」と言われて出かけた、スペインのロハで描いた作品が優賞になりました。ふとして見つけた場所ですね。ちょうど地中海に近いほうです。

「ろくろの辺り」　F100　1976年　第38回 一水会展

―県立美術館で『静中動』という展覧会をされて、ずいぶん沢山出されてますね。

静中の動展でシャルトルの作品を観られた人がシャルトル市長に言うて市長から展覧会の依頼があった。シャルトルが奈良の桜井市

と姉妹都市やねん。で、四十三点日美さんから送ったんです。

―大個展ですね！ 先生はどのくらい滞在なさったのですか？

三週間。費用は全部シャルトル市が出された。はじめ大使館へ挨拶に行って、開会式では日本の大使、シャルトル市長などが挨拶された。そのときに吉野谷幸重さんの娘さんがパリに居られ、花束を持ってきてくださった。教会のステンドグラスを見せてもらったりパーティーをやってもらったり、民放に出たり色々やったんですわ。ほうぼうへも連れていってもらいました。それから幼稚園とか高等学校での指導もしてくれと。

―フランスの教育現場で教壇に立たれたりされたのですね。

はい、先生方に指導。

―四十三点は凄いですね、大きな作品が多いですし…

「グレーの朝」を市長が欲しい言われました。それでそれはシャルトル市にあります。

―美術教育の面で先生が歩まれた道についてもう少しお話を伺いたいと思います。

現場で勤めたのが飛鳥小学校と三笠中学校とふたつだけなんですね。それから市の教育委員会、県の教育委員会。その間に文部省から派遣されてヨーロッパに行ったことがある。デンマーク、イギリス、スウェーデン、パリ、西ドイツ、最後ソ連なんです。ソ連は写真写すのも厳しかったけどね。まあ、色々あったけどな。ちょうど飛鳥小学校の百十周年。それから文部大臣教育者の表彰、昭和天皇の拝謁（はいえつ）を戴きましたし、それから奈良教育大学の教授になって、学長から「教育資料館」というのを造って欲しいと言われて僕は館長になりました。

資料は持ってきたんですけど、これは美術教育、教育大のときやね。これは「望ましい幼児教育」。それから学習指導要領。奈良県の教育研究所の所長四年やったときの研修の手引き、僕の名前も出ています。

―教師がこれを読んで美術教育に生かしているということですね？

色々とやってるんですわ。

―ところで77回展では室生の絵を78回展では参道を描かれてます。これからも奈良近辺の風景を取材されて？

奈良はね、描くとこなんぼでもあるんですよ。室生もええしね曽爾（そに）も描いたことあるしね、良いとこですよ。

―奈良に生まれ育った先生ご自身の美質といいますか、画家としての体質は、伝統をすでに体の中に蓄えられているものだと思います。奈良をテーマにまた傑作を描いて頂きたいと思っていますが。

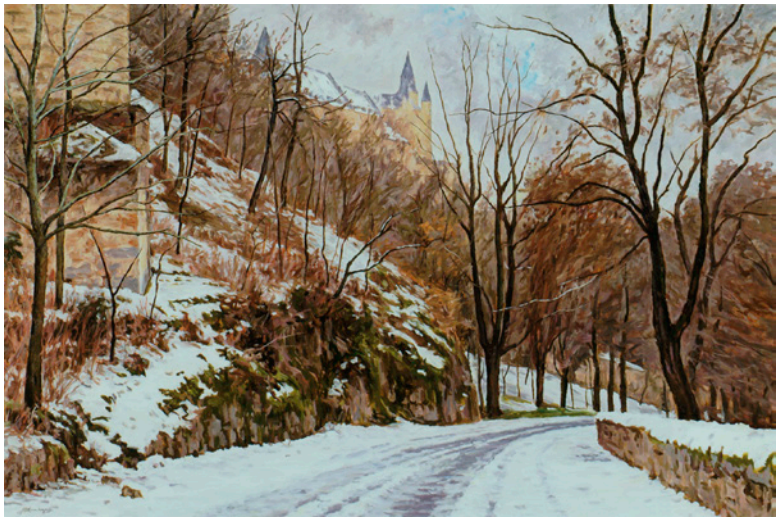
そうそう、描きたいと思ってますねん。

―先輩の先生方とか周りの先生方の「絵に対する姿勢が正しい、素晴らしい」とお書きになっていますけれども…

創立会員の先生方、あるいは周りの方々の作品には品格があると。髙田誠先生の作品が薬師寺にあります。薬師寺の管長、僕の教え子で、それが髙田先生の家までもらいに行ったらしい。先生の奥さんがそれを観たいと。「それやったら今、蔵にありますけどお見せしますわ」言うので髙田先生の奥さんと娘さん、おふたり連れて行った。

中村琢二先生はお弟子さんをたくさん連れて来られたりしてましたので、僕も色々と教えていただいた。寺井力三郎さんは、奈良へ来られて僕と一緒に絵描きに行ったことあんのや、奥さんは俳句作られて。淺見嘉正さんは僕と文部省で一緒になった。省の横に教育会館が出来たときに三週間、色々美術の話を聞いたり、他へ見学に行ったりしたんですわ。吉崎道治さんとは琢二先生との関係でよく知ってますが、斑鳩やね、法起寺などへよく描きに行かれましたわ。今頑張って下さっている方々もそうだと思うんですけどね、表現内容の幅の広さ深さ。そういうようなことをまた、若い方も頑張って欲しいと思うんですね。

―いま、研水会は、委員四十人、準会員三十一人、会員百三十人、



「雪の日」 F120　2008年　第70回記念 一水会展

「朝もやの参道」 F100　2016年　第78回 一水会展

一般二百十三人、計約四百人で、凄い規模です。和歌山と滋賀が今ちょっと少ないですか？

そうですね。和歌山は中畑艸人先生の地元やからね。それと滋賀。どの場所も頑張って頂けるように広めて行きたいなと思っているんですわ。

―安井先生が「自然をないがしろにしてはいけない」ということを仰っていたということですが、辰巳先生はよく研水会で「人を魅了する作品」ということを仰ってますよね。

大事なことです。迫力があるっていうかね、そういう作品を描きたいなと思ってるんですわ。それからこれも大事なことやと思うんだけれども、「自然の中にひそむ心」の表現。僕はよく「絵はわがこころの詩（うた）」ということ、これも言うんですけどね。そしていつまでも遺るような絵を描きたい。感動を持つ人生と言うんかね、夢中になる楽しさとか、そういうことが大事やと思っているんですわ。

―夢中になって取り組む生活、それが人生に潤いを与えて貴重な人生を送れるだろうと先生は仰ってましたね。

そうです、そういうことですわ。教育者終わったら百姓だけやっておられるっちゅう方も多いですがね。僕自身としてはやはり絵がある、描ける。そういうことが非常に有り難いと思っているんですわ。まあ大体子供の頃を入れたら七十年ぐらいになってくる、今年僕は八十八やからね。できたらいつまでも頑張りたいなあと思うてますねんけどね。

―先生が米寿を迎えられたとは思ってもいませんでした。先生のお話は希望に満ちていて、本当にエネルギッシュで、私たちも刺激を受けて勉強になりました、有難うございました。

いやいや。まあ、お茶を淹れてきます。

以上「あのころこれから」

二〇一六年六月二十八日

奈良県奈良市紀寺町

辰巳文一先生アトリエにて

二月堂を背に

自由投稿欄 水路

揮毫　淺見 嘉正

「私のモチーフ」

神奈川県・服部 三郎

昨年秋、卒寿を超えた私がなんと一水会会員に推挙された。大きな栄誉であり、諸先生方に心より感謝申し上げている。

私は第61回展初入選以来一貫して建物を主題にした絵を描いてきた。友人達からお前の絵はデジタルで面白くないとか詩情がないとか椰揄されながらも建物に執着しているのは、要するに明治大正期の先達連の威風堂々たる芸術性豊かなレガシィに敬意と憧憬を抱いているからに外ならない。私が小学生の頃建築家であった父が学会のコンペに応募する際、大きな画用紙に描いていた淡彩のパースを見て子供心にその美しさに感銘を受けていた事も一因であろうか。

近年文化財の保存活動が盛んであることは喜ばしいことであるが、一方では大型の建築物が乱立する時代となっている。例えば神田のニコライ堂はビル群の底になっていてスケッチポイントを探すのに難渋する。こんな時はグーグルを活用したり、僻撤図を選んだりして良い構図が得られるよう努力している。

「妻は私の師」

静岡県・永谷 光隆

親の背を見て漁師になり、十年足らずで舵を持ち、波風荒い遠州灘へ四五馬力ディーゼルエンジンの小さな木造船（五t）で、日の出前から白子（しらす）漁に出漁する。好漁の時ばかりでなく、時化（しけ）や不漁など自然相手の漁はどんなに頑張っても到底勝てるはずもなく、立ち向かうのでなく仲間になり、経験と度胸あとは自分の腕を信じて舵をとり、乗り切る日々でした。

二五年程前から、漁が思うようにならない時などには、気分転換に絵を描き始めました。無心になり自由に絵を描く事が生活の一部になっていきました。我流で描きあげた絵は、いつも妻の意見を聞く事が恒例で、今でも続いている。

最近では、私にとって一番の評論家で簡単には褒めてもらえない。でもなぜか納得している自分もあり、時々、私の師ではないかと思う事さえあります。半世紀になる漁師魂で頑張るしかない。褒めてもらうまでは…

雲読めば　風読む妻と　冬の漁

「花に寄りそい…」

山口県・岩池 和代

「草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に写生して居ると、造化の秘密が段々分ってくるやうな気がする。」と、写生による表現の重要性をいった子規の言葉。

自然に恵まれた温暖な瀬戸内に住んで気が付くと、私のそばにはいつも草花の存在がありました。或る時は勇気や希望を、或る時は慰めや優しさを、さらには生命の神秘や宇宙の大きさをも教えてくれる草花たち。

里山を歩き、庭に出てスケッチする時が至福の時間です。いかにそれを作品に仕上げるか、試行錯誤しながら造化の秘密に少しでも迫れるように願いつつ、花

吉崎道治のちょっと道草 ⑤

福島県　只見の宿

只見線田子倉についたのは真暗で人影も無い。駅前交番で尋ねた宿へゆき「交番ですすめられたと云ってはいけない！と云われたけど親切な宿だと教えられました。泊めていただけますか?」と交渉したら、お婆様は笑って泊めてくれた。嬉しかった。以来、駅か交番で尋ねるのが安心！

東京都　ポンビキ

ポンビキにつかまると高いぞ！先輩の小泉先生は云う。港の荷物にかくれて陽があがるのを待った。結局探した写生地は、この島一番の高級ホテル。さて帰る頃になって「吉崎君幾ら残ってる?」「えーと大島に近い港は伊東か、これなら間に合う」。伊東について小泉先生の妹様に電話して借りたっけか。

兎にかく帰れた事は確かだが詳細は不明。貧乏絵描きのすることだが、私が残ってポンビキになっていたかもしれない。

長野県　偽札作り

中央アルプスと南アルプスにはさまれた駒ヶ根、特に春桜の頃と秋が良い。池も点在し白樺も有り、居ながら描ける。若い頃は午前に10号、午後8号、夕に3号と写生していたので、民宿のご主人が「その絵いくらで売れる?」○○と答えたら「それでは偽金造りみたいだ」と笑った。売れれば の話だが…

一発です

デッサンを描く時、パンで消したり調子をつけていたら、「吉崎君、消す位なら描くなよ」と云われた。安井曽太郎先生は水平線を描くのに半日かかったそうですが、私の写生が一発で色を決めてゆくのは師中村琢二に学んだもの。タバコを吸いながら完成予想図を考えるのも師の影響でしょうか！

に向きあっている私です。

折しも、隣の市には町を一望する永源山公園があり、チューリップが咲き乱れ、地元の多くの人達の憩いの場となっています。そこには静かな佇まいの周南市郷土美術資料館・尾崎正章記念館があり、故・尾崎先生の懐かしい作品の数々に会うことができます。

市川 広美　画

「テーマについて」

埼玉県・城 眞知子

ここ埼玉に生まれ、育ち、ほんの四、五年離れただけでここにおります。よく他所に行くと改めて自分の生活の場の良さに気付くと言います。が、私はなかなかそんな機会を持てずにおります。だからこそ、身近なすぐそこの「美」に気付きたい。

比較的自由な時間を持てる今だからこそゆっくりと見出すことができるのでは…例えば柚子の実りは知っていてもその花の散る様を見ていたか、巣の中央に陣取るクモは二本ずつ脚をそろえ頭を下にしているところを見たか、剪定しない青桐はあんな実をつけるのを見たか…などなど、驚きとともに新鮮な思いにとらえられます。流れ去る時の流れのなかで「絵を描く」という行為を通して、しっかりと私の脳裏に溜めたい。そして私の気付いた「美」を私なりの表現方法で誰かに届けることができたなら、幸せです。

「地元が大好きです」

石川県・髙崎 高嗣

能登半島最西端の漁師町に生まれ育ち、制作活動に励んでいます。映画「ゼロの焦点」や数々のドラマロケ地にもなる風光明媚な海岸線が続きます。気休めなのかも知れませんが、四季折々厳しくも美しい絶景を眺めながらの早朝ウォーキング約一時間が一日の始まりで、作品の構想を練るにも良い時間になっています。

そんなこともあってか第77回一水会展からは、モデルさんの後ろに地元の風景画が飾ってある設定の作品を発表しています。長くモデルをしていただいている細身で物静かなMさんも地元の方なので「故郷愛」に向かうのは、自然な流れだったのかも知れません。

美しい景色に素敵なモデルさん、そして美味しいお魚、なかなか痩せられません(反省)。

最後に有名な格言を一つ「能登はやさしや土までも」こうありたいと思う今日この頃です。

「茅ヶ崎市立美術館と私」

神奈川県・田中 久美子

茅ヶ崎駅から海に向かって歩いて約五分、緑豊かで閑静な住宅街の一角に茅ヶ崎市立美術館があります。私が絵を始めるきっかけになったのは、ここで開催されたデッサン講座です。講師をされていた鍵主恭夫先生との出会いが一水会展への出品に繋がりました。

そんな茅ヶ崎市立美術館は私にとってかけがえのない大切な場所です。茅ヶ崎は小山敬三先生が名誉市民となっておられることもあり、美術館には小山敬三先生の作品が多数収蔵されています。湘南の空気と陽ざしを満喫できる素敵なカフェがあるのも魅力で油絵、水彩、デッサン、造形などのワークショップも充実しています。近くにはお洒落なビストロやスイーツ店もあるので、ぜひ一度訪れてみてはいかがでしょうか。

一水会事務局だより

図録のお渡し方法

二冊謹呈致しますが、一冊はご自宅にお送りします。もう一冊については図録引換券をお送りしますので、お名前を記入して都美術館の一水会事務所にお持ちください。その券と引き換えで一冊お渡しします。初日は少しお待ちいただくかもしれません。また、図録引換券は、どなたにでも譲渡できますので知人への図録プレゼント券としてご活用ください。会期中に取りに来られない方は、本展終了後2冊目をお送りいたします。

ギャラリートーク

午前・午後の二回に分けます。九月二十四日（日）と、翌週の九月三十日（土）に予定しています。どなたでも参加できますので、ぜひお聴きください。

九月二十四日（日）
午前▼十時三十分～十二時
五分【会場】第一棟・二棟
午後▼十三時～十四時三十
五分【会場】第三棟・四棟

九月三十日（土）
午前▼十時三十分～十二時
五分【会場】第一棟・二棟
午後▼十三時～十四時三十
五分【会場】第三棟・四棟

電話のかけ間違いにご注意ください。

最近、《一水会》という名称の別団体が間違い電話でお困りのようです。本会事務局に電話の際は、電話番号をお確かめの上、ご連絡くださいますようくれぐれもご注意おねがいします。

一水会の組織や活動を記載してある一水会定款を改訂しました。

前年度、組織に準会員が含まれたことや、会員・会友推挙についての項目が変更になっています。委員・会員・準会員の方には住所録といっしょにお送りしますのでご覧ください。

「美術一水会 facebook」ご覧ください。

一水会ホームページがあるのをご存知ですか。「事務局」というページをクリックしていただくと「美術一水会facebook」が誰でもご覧になれます。78回展の会場の様子や精鋭展・選抜展・一水会に所属されている方々の個展の様子など、リアルタイムでご覧になれます。

最近の動静

【逝去】高橋康夫氏（委員）
山田収男氏（委員）
謹んでご冥福をお祈りいたします。

【休会】榎本秀俊氏（委員）

芥子園（かいしえん）研究会（大作の研究会）のお知らせ

本年度大作の研究会を左記のとおり実施します。どなたでも参加いただけます。作品持参のうえ、会場へお集まりください。

第1回 六月十八日（日）九時三十分～十二時・十三時～十六時
●会　場／日展会館二階
東京都台東区上野桜木二－四－一 ☎〇三－三八二二－〇四五三

第2回 九月二十四日（日）九時三十分～十二時・十三時～十六時
●会　場／日展新会館二階
東京都台東区上野桜木二－十四－三 ☎〇三－五八〇九－〇八〇三

●搬　入　出／各自で手配のこと。※日美が便利です。☎〇三－三八二二－三八五四
●参　加　費／各回五千円
※1回目は構図など下絵で指導します。完成していても構いません。
作品は何点でも可。
※2回目は完成に近い状態でご持参ください。
※出欠席の連絡の必要はありません。
●お問合せ／田辺知治 ☎〇四三－四九六－一〇七〇
栗原髙光 ☎〇四五－八六一－四四三六

第79回 一水会展

東京都美術館
9月20日（水）～10月5日（木）
※休館日 10月2日（月）
授賞式・懇親会／9月23日（土）
ギャラリー・トーク／9月24日（日）・30日（土）

名古屋展	11月7日（火）～12日（日） 愛知県美術館ギャラリーA～G
大阪展	11月21日（火）～26日（日） 大阪市立美術館
金沢展	12月6日（水）～10日（日） 金沢21世紀美術館

第19回 埼玉一水会の人々展

日時▼五月二十一日（日）～二十七日（土）十時～十八時三十分
※但し、初日は十七時三十分終了、最終日は十六時終了。
会場▼川口総合文化センター リリア 一階 展示ホール（埼玉県川口市）
委員によるギャラリートーク
日時▼二十七日（土）十三時～

第39回 神奈川一水会作家展

日時▼五月二十三日（火）～二十八日（日）十時～十七時三十分
※但し、初日は十三時～十七時、最終日は十六時終了。
会場▼アートフォーラムあざみ野内、横浜市民ギャラリーあざみ野（神奈川県横浜市）

第12回 栃木一水会絵画展

日時▼六月二十七日（火）～七月三日（月）九時～十八時
※但し、初日は十三時～十八時、最終日は十六時終了。
会場▼栃木県総合文化センター 第四ギャラリー（栃木県宇都宮市）